

やくしかノート 4 お仕事編

作 揚妻 直樹・揚妻 柳原 芳美

五月二十日 午前 屋久島の西に広がる森

木々の若芽が一気に伸びだすこの季節、森は一年の中で最も生気に満ち溢れている。強くなり始めた日差しと、それを包み込む柔らかな緑に誘われるように、私はこの森の中に分け入ってしまった。すぐに誰かが行き来したような一筋の跡を地面の上に見つけた。釣り人が使う道だろうか、それとも獣道なのだろうか。その筋をつたって坂をしばらく下ってみることにした。

少しすると突然、数メートル先の岩の陰から三頭の鹿が「ギャン」と吠えて、ダダダダッと斜面を一目散に逃げていった。向こうもビツクリしたのだろうか、こちらもビツクリさせられた。道路で見かける鹿は、人や車が来ても、あまり気にしないのんびりした奴ばかりだ。でも、今のは野生っぽい反応だ。少し森に入れば、鹿にはまだまだ野生が残っているようだ。

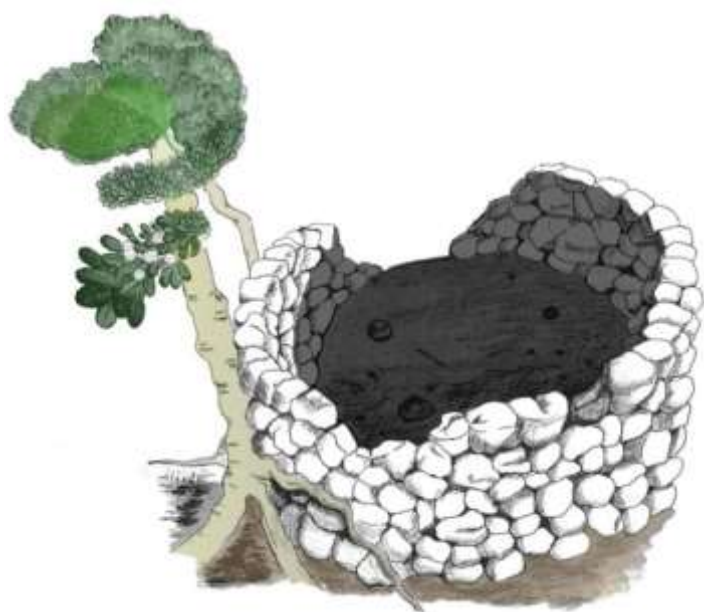
でもそこで、ふと疑問がわいた。「野生」っぽいとはどういうことだろう？ なんだか野生の生き物は人を恐れるべきだと決めつけてる気がする。自然の中で自力で生きているんだしたら、どう振舞おうと、それは立派な「野生」じゃないか。人間が勝手に「野生」とはこうでなきゃならんとレッテルを貼っているのではなからうか。「最近の鹿は人を見ても逃げず、態度がふてぶてしい」という人がいるが、それは人間の思い込みのようにも感じる。

森の斜面をどんどん下っていくと、藪が濃くて見通しが利かな

い所があるかと思えば、木がまばらでスカスカの所もあって、この森は変化に富んでいる。そのうち、開けた平らな場所に出くわした。そして、シダの茂みの後ろに妙なものを見つけた。それは丸石を円筒状に積みあげたもので、一部が崩れている。その円筒の中を覗いてみると、底は平らに固められたようになっていた。歴史の教科書で見たローマの円形競技場コロセウムにちよつと似ている。でも、直径は四メートルくらいとずっと小さい。小人たちの拳闘場としては、ちよつどいいサイズかもしれない。

この平地の周囲の林をよく見回してみると、低い石垣が作られていたり、縁の欠けた茶碗や空き瓶が転がっていたりする。草木にうずもれてよく分からなかったが、どうやらここには昔、人が住んでいたようだ。

そう思つて小さな円形競技場を眺めると、ようやく何だか気づいた。数十年前までここには小さな集落があつて、炭焼きなどもしていたと聞いたことがある。その炭を焼く窯の残



骸のようである。そういえば、本屋で種子・屋久の昔の写真集を立ち読みした時に、屋久島では一時、製炭が農業より重要になるくらい盛んだったというようなことが書いてあった。こうした炭窯跡はきつと森のあちらこちらに残っているに違いない。

ここで炭を焼いていた人たちはどんな生活をしていただろう。木の切り出しをしたり、寝ずの番で炭窯の火を調節したり、朝から晩まで働き詰めの大変な生活をしていただろうか。毎日、何時間くらい働いていたのだろうか。

ポコッと突き出た岩に腰掛けて、昔の人の暮らしに思いをめぐらせていたら、後ろの方からカサツ、コソツと落ち葉を踏みしめる音が聞こえてきた。振り返ると、そこには一匹の雌鹿が立っている。そして、こちらを見ながら、コンニチハをしているように首を上下させた。こいつは逃げないようだ。でも、しょっちゅうこちらを振り向くので、かなり警戒している。

そこで、ふと気になった。こいつらは一体どのくらい、働いたり、休んだり、遊んだりしているのだろうか？ 過酷な労働を強いられるのだろうか、それとも豊かな森でダラダラ暮らしているのだろうか？ この森で昔暮らしていた人々と、今暮らしている鹿が、ダブって見えたような感覚に捉われた。

五月二十六日 夜七時 運転中

出先での仕事を終え、ついでに買い物を買って済ませて、家路へと愛車を走らせていた。だいぶ日が長くなったが、さすがにこの時刻になると暗くなってきた。道路の周りには林とすすきの原っぱが続い

ている。少し行くと、ゆるく曲がった道の先の方に何やらボーっと小さな明かりが見えてきた。人家はしばらく見えないはずである。何か気味が悪い。

徐々に近づいていくと、そこには夕闇にまぎれて薄汚れた小屋が立っていた。明かりはその小屋の窓から漏れ出していたのだ。車を停めてよくよく見ると、「屋久島野外博物館・別館」の看板が見えた。なんのことはない、これまで何度か訪れたことのある場所だった。しかし、これまで職員もお客もいたためしがない。見てくれも中身も寂しい限りである。そこになんと今日は、こんな時刻に電気がついていないか！ 誰かいるに違いない。そこで物好きにも、ちよつと覗いてみることにした。

同日 屋久島野外博物館・別館

「こんばんはー」と入り口の扉をそーっと開けると、館内は蛍光灯が煌々とついている。でも、ぐるっと見渡してみても人影はない。もう一回、「こんばんはー」と大声を出したが、返事はない。ただ、いつもと違うのは正面のテーブルの上に魔法瓶とマグカップが置いてあることだ。しかも、そのマグカップから湯気がユラユラ立ち上り、紅茶のいい香りが放たれている。ついさっきまでここに誰か居たようだ。少しすれば帰ってくるだろう。博物館の人だろうか、それとも来館者であろうか。せつかなので少し待ってみることにした。とはいえ、こつちも少々腹が減ってきた。この手の施設では館内禁煙・飲食禁止というのが通例だが、幸いそんな注意書きはどこにもない。第一、既にお茶している人がいるわけだ。だったら自分もと思い、車に戻って、ちよつど買って来たココナツサブレと牛乳パックをガサゴソとレジ袋から取り出し、小屋に持ち込んだ。

表 1. シカの主な行動カテゴリー

1 移動	他の行動を伴わず歩く、あるいは走る。
2 採食	食物の探索および取り込み。ゆっくりとした歩行を伴うことも多い。たまに、横臥したまま首の届く範囲で食物を取り込むこともある。
3 注視・休息	立ったまま、あるいは横臥して、目を開けたままじっと動かない。何かを警戒している場合と、単に休息をとっている場合とあるようだが、両者を区別することは困難である。警戒しながら休息することもあると思われる。また、横臥している場合には、まぶたがやや閉じ気味になることも多く、睡眠に近い状態と思われる。
4 睡眠	横臥した姿勢で完全に目を閉じる、あるいは首を曲げ腹か背中につけて動かない。
5 反芻	立ったまま、あるいは横臥して、反芻胃（ルーメン）から食物を口に戻し、咀嚼する。
6 グルーミング	毛づくろい。自分自身で行うセルフグルーミングと他者にする、あるいはされるアログルーミングがある。
7 アブ払い	アブなどの吸血性の昆虫の活動が活発な時期には、自分にまとわり付いてくる昆虫を口などで払う行動がよく見られる。
8 その他	アログルーミング以外の社会的行動（闘争・ディスプレイ）、繁殖行動、哺乳、においつけ、オスの場合の角研ぎなどが含まれる。

やはりココナツサブレには牛乳が欠かせない。ボーっと待っていてもなんなので、ちよつと気になっていた、鹿がどれだけ働くものなのかを調べてみることにした。幸いここにはその手の本や資料がたくさん置いてあって、自由に見ることができるところで、あいつらにとって「働く」ということはどういうこと

なのだろう。やはり日々の生活のため自分の儲けになることをするのが働くことであろうか。もつとも人間の場合には、仕事を通じて社会的な役割を果たすという意味もあるはずなのだが、最近はそのような意識も薄れているようだ。まあ、鹿にとっては歩き回って餌を探すのが「働く」に相当するのだろう。そこで、こうした鹿の行動や活動について書いてありそうなのを本棚から物色した。そして、「熊毛学術文化財団・研究助成事業 『ヤクシカの活動時間配分』 代表者・仲間しと子」という緑色の薄い報告書を見つけ出した。

とりあえずページをパラパラめくってみると、鹿の行動の分類を見つけた（表 1）。行動の種類が人と比べてなんとなく少ない。でも、自分の朝起きてから寝るまでの行動も、大雑把にはこのくらいの分け方で収まるような気もする。

これまで鹿が「横臥」つまり寝転んでいるのは、ただ休んでいるのだと思っていたが、それだけでも無いようである。「反芻」は寝転んでる時にもよくやるようだ。この報告書によると、反芻は胃に貯めこんだ食べ物を口に一端吐き戻し、咀嚼してからまた飲み込む行動で、食物はこの反芻をした後でないと消化管の先に進んでいかず、栄養も吸収されないのだそうだ。見た目では「採食」が食べられているように思われるが、鹿の場合の採食は単に胃という袋に

報告書
『ヤクシカの
活動時間配分』
より

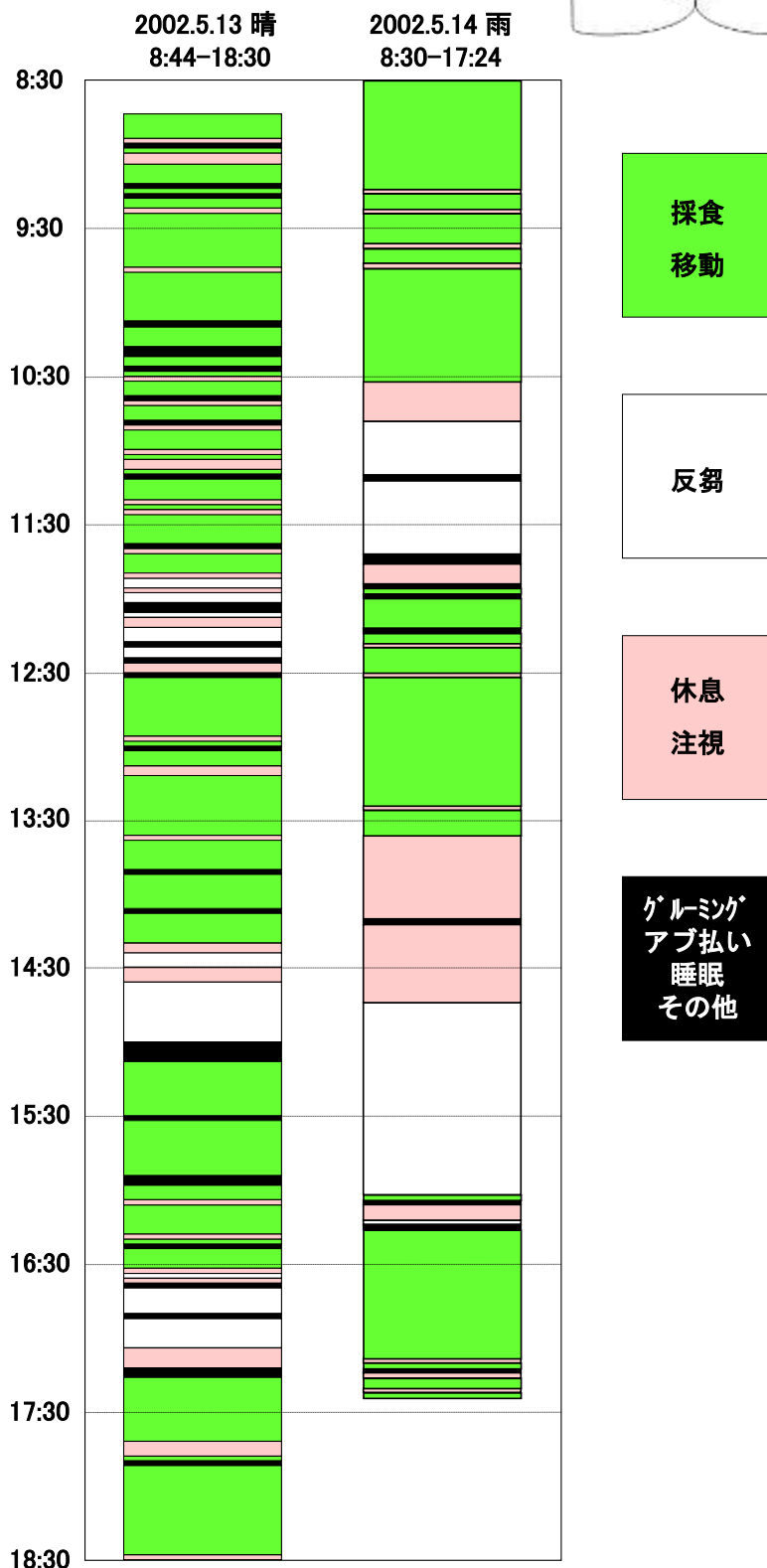


図1 5月13日と14日にテト(推定四歳オス)が行った行動。
行動の記録は2分ごとに行った。

餌を詰め込む作業をしているだけで、それだけでは栄養補給に繋がらないわけだ。これは私たちの竹の子(孟宗竹ではなくコサン筍とか細い奴)採りに似ている。藪の中からガサゴソ竹の子を探しては、ちぎって、袋にひよいひよいと詰め込んでいく、この作業が鹿の「採食」。その竹の子を皮ごと炙って、塩をパラツとかけて食べるのが「反芻」に相当するらしい。そうすると「働く」に当たるのは大雑把にいえば「1移動」と餌集めである「2採食」になりそう

である。
報告書を読み進めた。鹿は夜行性だとよく言われるので、夜中心に働いていると思っていたが、必ずしも夜にだけ活動するわけでもないらしい。これによると「シカは草地や畑・開けた場所などは、人の活動を気にして主に夜に活動しているようである。しかし元来、シカは昼も夜もどちらも活動可能である。人の影響の少ない場所では全体的に夜間より昼間に活動性が高まる傾向にある。従

って、そういう場所では日中の観察だけからでも、ある程度、彼らの活動を推測できるはずである。」とある。そして次から、実際のヤクシカの行動について書かれているのだが、例によって学者の書くものには言い訳めいた前置きが長い。

「観察者をあまり気にしない推定年齢四歳以上のオス三頭・メス一頭を調査対象とした。様々な季節で、昼間にこれらの個体をできるだけ長時間追跡し、その行動を記録した。ただし、全体としてオスのデータが多いので、オスに偏った傾向が結果に表れていると思われる。また、調査対象以外の個体は観察者を避けることが多いので、社会行動が起こりにくかった可能性が高い。なお、総観察時間は一三三時間余りだが、よりデータを蓄積して精度を高める必要がある。」

図1には、推定年齢四歳のオスが二日間にとった行動を例示した。五月二三日は一つ一つの行動が継続した時間が短い。ただし、比較的、移動・採食が中心となった時間帯が四回見られる。一方、雨が降っていた五月二四日では、それぞれの行動が継続した時間が長い。一三時半頃から一六時過ぎまでの長い休息・注視と反芻は、強い雨を避けて大きな倒木の下で雨宿りをしていた際に行われた。そして、雨が小降りになってから移動・採食に出かけた。得られた全てのデータを用いて、移動・採食が継続した時間の長さを調べたところ、ほとんどの場合が十分間以内であったが、最長は八〇分間に達した。

総観察時間に占める各行動カテゴリーの時間割合を算出した。その結果、シカは全体の四割の時間を採食にあて、ついで移動に二割、注視・休息に二割、反芻に一割強をあてていた(図2)。印象としては、メスに比べ、歳をとったオス(五歳以上)は移動と採食

にかける時間が短くなるようである。」

鹿の世界でも人間の世界と同じように女は働き者で、男は怠け者なのかもしれない。いやいや、これはあくまで日中とったデータである。きっと雄は「夜のお仕事」に励んでいるに違いない。私はそう信じたい。全体で「働く」にあたる採食と移動は合わせて六割を占める。日中一二時間として、その六割なら七・二時間だ。でも、夜の間も同じ割合で働いているとすると一四・四時間となり、明らかに労働基準法違反である。夜はもう少し休むことが多いとしても、鹿はかなり長時間働いているようである。やはり自然界はそれ

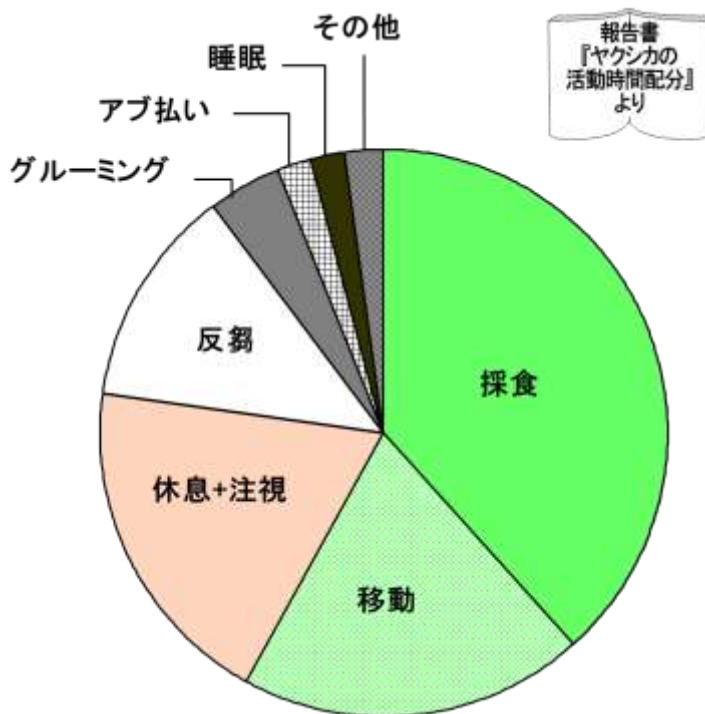


図2 ヤクシカの活動時間配分。観察時間中に各行動カテゴリーが行われた割合を表した。これにより単位時間当たりシカがどの行動をどれだけ行うのかが解る。

なりに厳しいらしい。

同日 夜八時過ぎ 屋久島野外博物館・別館

小一時間が経ち、持ち込んだお菓子を食い尽くしてしまった。腹がまだすいているような、一杯になったような妙な腹心地である。館内はシンと静まり返り、窓の外は真っ暗だ。テーブルの上のマグカップの主は一体、誰なのだろうか。これ以上、待っていても無駄なようである。部屋の明かりを消して外に出た。月のない夜空には星座の形も解らなくなるくらい、たくさんの星々が散らばっていた。

ただし書き

このお話はフィクションであり、登場する個人・団体および報告書等は架空のものです。ただし、主人公の体験や報告書の内容は筆者らが行ってきたヤクシカの調査結果などに基づいています。

このお話を書いた後、夜間もヤクシカの行動観察をした結果、メスは夜間は休息する時間が長いのに対し、オスは「お仕事」している時間が長いことが解りました。ただし、観察個体数が少ないので個体差（個性）の違いによる可能性もあります。